図書館だより愛称「考人」について

図書部

皆さんは玉名高校前庭池東側に「考える人」像があるのを知っていますか？ぜひ実物を見てみてください。

本校の『図書館だより』の愛称は「考人」です。この愛称は、右記のロダンの彫刻「考える人」にちなみ、平成二二年に決定しました。玉名高校の知力の象徴・拠点としての図書館のイメージと、彫刻が学校にできたいきさつが由来となります。

ロダンの「考える人」像が完成したのは一九五八年のこと。今から六三年前です。

「玉名高校百年史　下」一七一ページに次のように記載されています。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ロダンの「考える人」像が前庭池の東側に完成し除幕式がおこなわれたのは昭和三三年二月八日のことであった。昭和三二年当時三年生であった宗正和之君が不治の病のため他界し、御遺族から最後にお世話になった学校へ何か残したいという話があった。相談を受けた担任の春川先生は、御遺族の気持ちを汲んでいろいろと考えた末に、柳川在住の彫刻家富重正男氏（東京美術学校出身）に相談された。宗正君のお母さんの気持ちに感激され、学校を見てから考えてみようということで、数日後に来校の上校舎、前庭のすばらしさに心を惹かれた富重氏は、前庭の一角にロダンの「考える人」の像を立てたらどうかという案を示された。費用の点が問題になったが「御遺族の寄附で足りない分は、お母さんの気持にこたえるために私が奉仕します」という制作者の話であった。最初の職員会議では、卒業生が前庭に対していだいているイメージがこわれるのではないか、あまり目立たぬ所に置いてはどうか等種々の意見があったが、結局現在の場所に落ち着いた。できあがって周囲とマッチしない時は別の場所に移すという条件がつけられていたという。富重氏は「考える人」像の建立が決まると、京都の博物館にある本物のロダン像を数度にわたって見に行かれ制作の資料とされた。前庭池の東側に実物大の白色セメント造りのロダン像が完成し、全校生徒、職員、御遺族参列のもとに除幕式がおこなわれた。後に完成した金栗四三氏の走る銅像と池をはさんで好一対をなし、今では生徒達に知力と体力の大切さを考えさせる一つのよすがとなっている。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「考える人」はダンテが扉の前で岩に腰を下ろし、詩想にふけっている姿です。もともとは「地獄の門」の一部であった像を独立した像として取り出して作品化してあります。拳を歯に当てて思索する姿は人類共通の普遍的な人間像を示しています。「考える人」像がある高校は他にあまりないでしょう。玉名高校生が思索する姿を象徴しているとも考えることができます。

この彫刻にちなみ、図書館が玉名高校生の思索の礎になることを願っています。

平成二二年四月、宗正君の同級生だったという方が体育祭の練習を見に来られました。その方は「考える人」ができた経緯を玉高生全員に知って欲しい、これからもずっと語り継いで欲しいとおっしゃっていたそうです。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「心にオアシスを・・・」

図書・教育情報部長　吉本　雪穂

何気なく手にした本を読みながら、その本の世界にどっぷりと入り込み、登場人物の気持ちになってワクワクしたり、イライラしたり、悲しくて思わず涙が溢れたりするなどの経験を幾度かしたことがあります。現実と違う世界の中で感じるこのような感情は、なんとも不思議な感覚です。

また、本を読みながら自分がイメージした世界と、映画化された世界を比べたりするのも楽しいものです。

コロナ禍で様々なことに制限がかけられ、生活が一変し、心が折れそうになる日々が続いています。そのような今だからこそ、是非読書の時間を充実させてみませんか。心が温かくなったり、知らない世界の発見があったり。もしかすると、皆さんの人生を変える素敵な本に出会えるかもしれません。

さあ、本を手にとってみましょう。